山崎川をゆく（２）

山崎川について、名古屋市緑政土木局『名古屋の河川』増補版、2007 年からも概観したい。

山崎川は、釣りや鳥の観察で親しまれている千種区猫ヶ洞池に源を発し、鏡池排水路、五軒家川などを集めて南西に流下する、延長 13.6km、流域面積 26.0 ㎢の河川です。流域は名古屋市の中央よりやや東部に位置し、上流部に「なごや東山の森づくり」に取り組んでいる平和公園や東山公園、中流部に瑞穂公園と大規模な公園が点在しています。このあたりは緑豊かな市内でも有数の環境に恵まれた区域で、文教地区でもあります。また、中流部の両岸 2.6km にわたる桜並木は“四季の道”と呼ばれるとともに、「さくら名所百選」にも選ばれた全国的にも有名な桜の名所であり、毎年、多数の観光客が訪れています。

下流部では、本市南部の商工業地帯の中心部を形成する古くからの市街地が広がっていますが、地盤が低いためポンプ排水の必要な内水区域となっており、昭和 34 年 9 月に名古屋を襲った伊勢湾台風では甚大な被害を受けました。

沿川には先史時代から人が住んでいたと考えられ、今から 5～6 千年前の大曲輪（おおぐるわ）貝塚（現在の瑞穂グランド内）や弥生時代の瑞穂遺跡、古墳時代の城山古墳群（千種区）など多くの遺跡や古墳が残されています。また、旧東海道や飯田街道、塩付街道がこの流域を横切っており、古くから人々の行き交う場となっていました。

山崎川は、高度に市街化の進んだ区域を流域に持つため、かねてより、伊勢湾等高潮対策事業・都市下水路事業などによる河道整備が進められました。しかし、その後も流域の土地利用の高度化は一層進展し、流下能力が不足する区間も多くみられるようになったため、昭和 48 年度以降、都市小河川改修事業により改修を始めました。現在は一部を除き 1 時間 50㎜ に対処できる流下能力を有していますが、より高い治水安全度の確保に向け、1 時間 60㎜ の降雨に対応できるよう、昭和 63 年度から中流域の約 2.8km（可和名橋～出合橋間）を「ふるさとの川整備事業」として整備を進めています。また、平成 7 年度からは、阪神大震災を教訓として護岸の耐震工事を行ったり、河道の洪水流出のネックとなっている「名鉄名古屋本線橋梁」の架け替えに取り組んでいます。

（2017 年 4 月 2 日）